思い出の一枚

　羽黒山松例祭の山頂の国分け神事である。建造物を離れた芸能舞台は、日本人の多神信仰を反映して自然界に多様に存在する。顕著な自然舞台をあげると、山、海、広場である。しかも、神の降臨する依代は自然物から人工物へ変わり、舞台も建造物へと進化する。写真は羽黒修験が毎年大晦日の夜に行なう松例祭で演じる宗派の支配地を占う国分けの神事。

　芸能の場は神と巫が交流する依代の一種。
〇神は、本来目には見えない万物の霊魂のなかで、人間に幸福をもたらす存在である。日本人の神の認識は、霊魂の認識より遡るが、霊魂の認識によって神も動くようになった。
〇原始の人間は、神として生きたままでも神の国へ往来できたが、罪を犯して(多くは見るなの禁忌の違反)交流は絶えた。
〇この段階で、死者の霊魂なら神の国へ往来できるという観念は残り、祖霊信仰を生だ。神を招くための祭りを催す職業的シャーマンが誕生した。シャーマンは神道系であり、仏教の渡来とともに仏教系シャーマン(僧)と、大きく二分された。
〇この巫系シャーマンの演じる神を可視化する所作から神の芸能が誕生し、神の止まる座(依代)から芸道が生れた。
〇神の芸能は、可視化された神の所作に接する機会であり、その空間が芸能の場。人間が新しく生まれ変わるきっかけを与える。

建造物舞台　造り物風流　名古屋の山車　福禄寿車

樹木　諏訪の御柱　山から引いた柱の上で木遣り

海　海神の祭り　三重県

　日本人の生業で漁業は大きな分野を占める。そのために神の他界を海にもとめ、海の神々を迎える多様な祭りが、主として漁業民によって営まれている。写真は熊野市ニ木島祭りの競漕の神事。

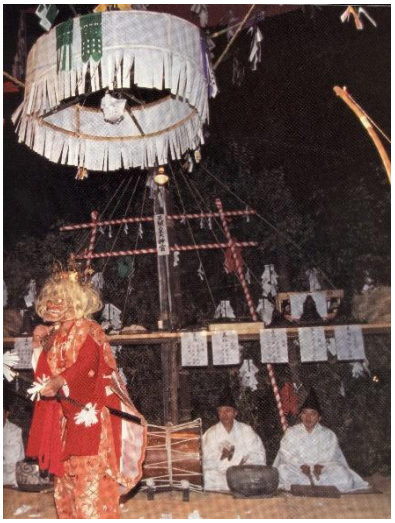
広場　樫原神宮新嘗祭　久米舞

　日本人の生業で農業はもっとも大きい分野を占める。そのため神は平地に多様な姿で出現する。神社が設営される時代がきても社前広場が芸能の場に選ばれる。写真は樫原神宮社前で演じられる古代歌舞久米舞。大和山間の部族久米氏が伝えた歌舞とされる。

建造物　　箱舞台の人形　傀儡子　江戸名所図屏風

　人形は大陸伝来の散楽の一種。とくに人形芸を演じた漂泊の芸能者集団を傀儡子といった。語源は朝鮮語の人形芸コクトウに由来するという説が有力。首にかけた箱の上で人形を遣い、箱廻し，でく廻し、えびす廻しなどと呼ばれた。この箱は神社を象徴する。

民間神楽の天蓋　銀鏡神楽　　中世に中国から受容



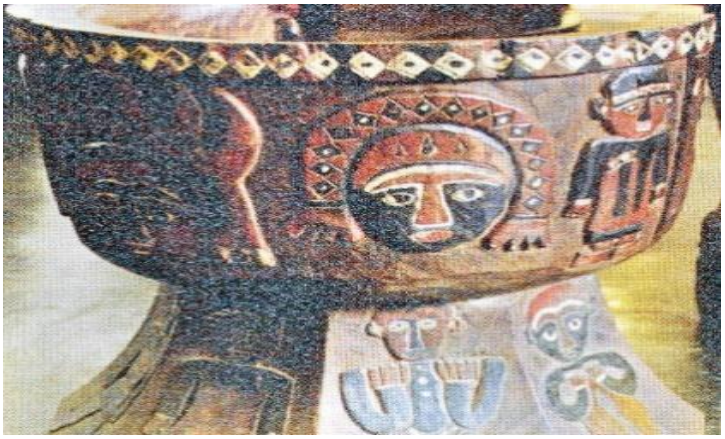
日本の芸能舞台は多神信仰を反映して神の出現するあらゆる場所に設けられた。山、海、広場などである。自然の立地条件を生かした芸能の場はやがて人工の建造物に変わっていった。そのときにモデルになったのは神社である。神社はそのまま芸能の場として現代にまで継承されるが、他方、神社の神域内に神社を模した神楽殿が造営され、能や歌舞伎の小屋へと進化する。日本の建造舞台には大陸、特に中国の影響が顕著であったが、舞楽舞台の周囲に植樹し、大地を表す正方形舞台(荘子・天は円、大地は四角)は継承しながら、天を現す円形天蓋、石や土を使用した永久舞台などは拒否した。そこには、大地、女性、太陽を主要信仰対象とし、神は臨時に訪れると信じた日本人の独自性がある。

縄文新論（45）

Ⅲ　台湾原住民社会から見る縄文文化

１　縄文土器

話は四半世紀遡る。一九九五年十一月二十九日(水曜日)。朝早く、私は、台湾屏東県の霧台郷(むたいごう)への調査の車の中にいた。霧台郷は原住民ルカイ族の居住地であり入村には政府の許可が要るため、屏東県政府山地行政課長杜良君さんに同行をお願いしていた。すべては私の教え子の台湾人で当時大葉大学勤務の葉漢鰲(ようかんごう)君の手配であった。車は途中、三地門(さんちもん)という村を通った。ここに私設の陳俄安(ちんがあん)博物館がある。この博物館はパイワン族のご主人とルカイ族の奥さんで経営する、この地方では有名な原住民民俗の博物館である。ここで、私は多くのことを学んだ。次は博物館門前の飾りである。



　毒蛇ヒャップラを彫刻した標識を家の前に立てるのが頭目の家の印である。すでに前々章（　Ⅰ　３　太陽と蛇の信仰）でのべたように、大頭目が太陽の子孫であるのに対し、それに続く高位の貴族の象徴で、平民が模倣することは許されない。ヒャップラは日本語の百歩蛇(ひゃっぽへび)からの変化。ルカイ語ではパラータ、パイワン語ではカナワナンという。ルカイ族とパイワン族は近縁関係にあり、むかし、人間がヒャップラと結婚したという共通の伝承があり、共に祖先は蛇だと信じている。民芸の壷にきまって蛇の模様がきざまれているのは、その壷から民族の先祖が生まれたという神話があるからである。ここから、日本の縄文時代の甕も、ただの容器ではなく、大地母神の母胎と信じられていたことが確認できる。　　つづく